

教育長室だより

第 22 号

2020.10.20

いつの間にか“通常でない今年度”も折り返し地点を過ぎましたが、コロナ禍はいまだに終息とはいきません。毎日、全国の新規感染者が報道され、学校でも対策が続いています。

それでも、秋のさわやかな風の吹くこの季節、前向きに様々なことに取り組んでいきたいものです。

○

さて、今回はしばらくぶりでもありますのでスマホの問題について再度考えてみたいと思います。

今年7月末に文科省から「学校における携帯電話の取り扱い等について」という通知が出されました。マスコミ等が一斉にスマホの学校への持ち込みが許可されるように報道しましたので、実際の内容とは違った印象、つまり「持ち込み許可」とか「持ち込み容認」という強い印象が広がりました。

しかし、内容はそうではなく、小学校、中学校ともに「教育活動に直接必要のないものであるから原則禁止とすべき…」と書かれています。これは平成21年の通知と原則は一貫しています。

○

この文科省の通知は主として「スマホが非常変災の際の危機管理に役立つから持たせたほうがいい」という意見を踏まえての通知だったと理解していますが、実際に例外的に持ち込みを認める場合についても書かれています。

そこで本町でもスマホの取り扱いについてガイドラインを作成中です。近々お知らせできると考えています。

○

皆さんのうちでも子どもさんにスマホを持たせているのでしょうか。プログラミングが学校で学ぶ内容になったこともあり、今の世の中ではパソコンやICTを使う技術も必要とされていますので、その意味で持たせているご家庭もあると思います。

その場合、何かルールは決めていますか。フィルタリングはされていますか。

ある調査では「ルールを決めているか」という質問に対して、保護者は約77%が決めていると答えています。しかし、その子どもたちに聞くと決めていると答えたのは約60%だったそうです。親は「決めている」と思っている子どもはそう思っていないということでしょう。親が管理するのもなかなか難しそうです。

○

子どもがスマホを使う上で子どもも保護者も気づかない危険にさらされることはすでにご存じだろうと思います。犯罪に巻き込まれる例、高額な課金を要求される例、人間関係のトラブルが発生する例などきりがなほどのリスクがあります。

わたしが特に心配する点が二つあります。

- ① 様々なサイトへの安易な投稿によって自分や周囲にとんでもない迷惑を与えること。
- ② 知らず知らずのうちに携帯の動画やゲームに依存し、やめたいと思ってもやめられなくなっていくこと。

この二つです。

○

今はさまざまなSNSへ誰でも簡単に言葉や画像、動画を揚げることができます。友達の何かの動画を撮って無断で投稿する。自分の家や部屋の様子を撮って揚げる。つい友達などの悪口を書きってしまう。

これらの投稿の内容は世界中の誰でもが見ることができます。いったん出てしまえばなかなか消去できない。消去できてもすでに誰かが記録して、別のサイトに揚げるなどということもある。これが①の心配です。

○

②は、スマホはゲーム機としても盛んに使われているということです。無数のゲームがダウンロードできるので、いろいろなゲームで遊べます。友達や知らない人と対戦することもできます。確かに興味は尽きないでしょう。動画サイトを見ることも大人気になっています。ついつい何時間もはまってしまったりします。

○

子どもたちが長い時間スマホにはまるのはやはりLINE（ライン）などの通信手段でしょうか。四六時中だれかと言葉のやりとりをしている姿も町でよく見ます。食事中もスマホを手放せない例も少なくないようです。

○

京都大学の前の総長で山際寿一という学者がいます。世界的なゴリラ研究者で、何年もアフリカのジャングルで過ごした人です。

この先生が、『スマホを捨てたい子どもたち』（2020.6 ポプラ新書）という本を書いています。

山際氏は小・中学生と話すことも多いようですが、その子どもたちに「スマホを使っている人は？」と聞くと大部分の子どもが手を上げるのに対して、「スマホを捨てたい人は？」と聞くと、これもかなり多くの子どもが手を上げるというのです。これだけはまっているように見える子どもたちですが、実はスマホをもてあまして、またはスマホをうっとうしく感じてるのではないかと山際氏は言います。

スマホを持っていることで友達のとのコミュニケーションが便利すぎて時にはこのつながりから逃れたいと思うこともあるのでしょうか。

○

山際氏は、AIの時代だからこそ人間の動物としての部分に注目して、体を含む五感で感じることの大切さを語っています。ゴリラと人間の子育ての比較なども詳しく紹介しています。子育てや人と人とのコミュニケーションについて考えさせられる本でした。